名もないエースの記録

numanuma

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

宇宙世紀００８６年　彼は地球の北アメリカ　とある連邦軍基地にいた。

新人な彼のエースパイロットまでの道のりとは・・

この物語はあるエースパイロットの話です。オリジナル要素が多く含まれています。

また、作者自体もそこまで文章力があるわけでもないので優しい目でお願いします。

目次

UC．0086　重力の底で……　1
UC．0086　重力の底で……（2）　5
UC．0086　重力の底で……（3）　8
UC．0086　重力の底で…（4）　12
重力の中の嵐　15

UC．００８６　重力の底で・・・・

宇宙世紀００８６年　一年戦争が集結し６年、デラーズ・フリートとの戦いから3年が経とうとしている時、北アメリカのとある連邦軍基地では・・・・・

「はぁ　はぁ」

「あと1周!!　ペースを落とさずしっかりと走れ！」

この基地では新兵の訓練の厳しさでは有名な基地だ。いくら兵学校で勉強や体力作り、基礎的な動きができていてもいざ新兵となったあとの訓練とはわけが違う。　兵学校の首席や優秀生がこの訓練に参加しても、「厳しい」と口にするレベルだ。

その分この基地からは優秀なパイロットが多数出ている。ここに所属していたということだけでも名誉なぐらいだ。

教官「ペース走終了だ！各自１９００から予定通り入浴をおこない、２０００からは夕食だ。時間に送れないように！解散!!」

教官は時間にとても厳しく訓練もハードだ。ただ体調を崩したりした時はとても優しく見舞いにも来てくれるのだ。

タークス「いや今日もハードだったよな、ペース走は嫌いじゃないが」

ルータ「でも分かってて志願したんだろ？ここの基地をよ」

タークス「まあそうなんだけどさ、ここまでとはね」

ロゼ「1周2キロを３０周、ラップタイムは誤差2分内ってきついぜ」

ルータ「そうだよな、まあ明日も頑張りましょうぜぃ」

彼らは今年入ってきた新兵。３人とも仲が良く、よく話しながら歩いていたりする。

タークス・ジガは三人の中でもリーダー気質な奴、真面目な性格でみんなを引っ張っていく。

ルータ・スデラは少しチャラいヤンキー気質、それでもしっかりとやる事はこなし、みんなを元気づけるムードメーカー。

ロゼ・ズルーンは真面目で細かい、この中で一番身長が低かったりする。

ー風呂ー

タークス「やっぱ風呂は生き返るわ・・・・あとお前筋肉突くのやめてくれねーか？ｗ」

ルータ「わりいわりい、マッサージだよｗ」

タークス「いやマッサージになってねえよｗ」

ロゼ「二人とも何やってるんですか・・・・夕飯遅れますよ？遅れたら怖いですからね教官。」

ルータ「・・・・・ロゼ、今何時だ？」

ロゼ「１９４５です」

タークス「結構まずいじゃねーか！早く着替えていくぞ！」

ルータ「俺体洗ってねえ!?」

二人「「馬鹿野郎!!」」

ー食堂ー

教官「お前ら結構ギリギリだぞ、もっと余裕みて行動しろよな」

タークス「すんませんルータが遅かったもんで」

ルータ「ちとまてなんで俺のせいにするんだ!?」

教官「まあいい、さっさと夕飯の準備をしろ」

ー自室ー

この基地では基本的に３人部屋だ。もちろんタークス、ルータ、ロゼの三人は同じ部屋である。

ルータ「いやー食った食った、なあ？」

ロゼ「ルータは少し食べ過ぎじゃないんですか？」

ルータ「いいんだよ！そんな事言ってっからおめえはチビのままなんだよ！」

ロゼ「なんですって～!!」

タークス「よせ二人とも、明日も朝から訓練なんだぞ、早めに寝とこうぜ。」

ロゼ「そうだな、じゃあおやすみ」
ルータ「おう、おやすみ」
タークス「あぁ」

数日後
こんな毎日が続いていたある日の夜の事。三人は教官室に呼び出された。
ルータ「俺なんか悪い事でもしたっけか？」
タークス「知らねえよ、訓練も真面目にやってたろ？」
ロゼ「ルータなら何かやっていても不思議ではないですかね。」
ルータ「何だと～???」
タークス「寄せ二人とも。こんな時間に騒いだら本当に怒られる。というかもう教官室の前だ。」
コンコン
タークス「タークスです」
教官「おう！入れ。」
タークス「失礼します」
教官「とりあえずまあ3人ともそこに座ってくれ。」
全員教官室に用意された椅子に座った。目の前に会議用テーブルとプロジェクタがある。
教官「とりあえずこの書類を見てほしい。これは最近における反連邦軍の活動数だ。我々が把握しているだけでも数が増えてきている。そこで地球連邦軍の上層部は普通の兵士ではなく、モビルスーツパイロットを増やす案が立案された。よって君達も明日からの訓練内容は、モビルスーツシュミレーターを使っての訓練となる。」
タークス「俺達もモビルスーツパイロットに・・」
ルータ「なんだかいきなりなんだな」
タークス「あぁ」
教官「とにかく君達もモビルスーツパイロットになってもらうってことだ。明日からの訓練内容が変更になるので注意しろ。」
3人「「はい！」」

教官「よし！解散」

ー自室ー

3人とも自室に戻り、資料を見ながら話を広げていた。

ルータ「おれもエースパイロットになって宇宙に行けるのかな？」

ロゼ「頑張り次第じゃないですか？」

タークス「そうだな。まあ頑張ろうじゃないか」

ルータ「そうだ！絶対エースパイロットになってやる！」

タークス「そのいきだ。」

こうして三人はエースパイロットへの第一歩を踏み出したのだった。

UC．００８６　重力の底で・・・（２）

ーモビルスーツ格納庫ー

教官「よし、きたな。お前たち！昨日の資料通りお前達にはまずシミュレータで訓練してもらう。慣れてきたら練習用の機体で練習だ。いいな！」

三人「「はい！」」

教官「よし、では早速各番号のシュミレータに乗ってくれ」

１番ータークス

２番ールータ

３番ーロゼ

ここでの設定はシュミレータは戦場の絆（アーケード）みたいな物です。

各自がシュミレータに乗り込んた。

ルータ「おぉ！これがシュミレータか！」

タークス「緊張するな、ルータは心配なさそうだが」

ロゼ「まぁそれはいいとして」

教官「よし！今からお前たちにはモビルスーツ操縦の基本指導を受けてもらう。そのシュミレータにシステムが組み込まれているから頑張ってくれ！」

ルータ「よし！絶対エースパイロットになってやる、こんなところで立ち止まってるわけにはいかねえからな。」

教官「いい心構えだ。では、はじめ！」

そして三人は各々指導プログラムを受け、モビルスーツの操縦が少しはできるレベルまで上達した。

タークス「つかれたな、ロゼ、今何時だ？」

ロゼ「もう１８４０」

ルータ「」

教官「何だ三人とももう疲れてるのか。」

ルータ「そりゃあ初めてなんですもん、慣れなくて疲れますよ」

教官「それもそうだな！よし！今日の訓練はこれで終了！明日は

シュミレータで戦闘訓練を行う。解散！」
ー風呂ー
ルータ「目が痛い」
タークス「その気持ちはわかる、あと肩が凝る。」
ルータ「もんでやろうか？」
タークス「お前は自分の体を休めろ！」
ルータ「あいあい。ところでロゼは？」
タークス「体を洗ってるよ。」
ルータ「ふーん」
ー自室ー
タークス「慣れない事をしたせいでいつもよりも疲れがひどく感じるな。今日は先に寝かせてもらうぞ」
ルータ「というか皆そうしようとしてるからみんな早く寝ればいいんだ」
ロゼ「そうですね、では電気消しますよ。」
こうして三人の新たな一日が幕を閉じたのだ。
このような訓練をこなし約２週間後・・・
教官「お前達はシュミレータの訓練でだいぶ慣れてきている。よって今日からモビルスーツに乗っての訓練となる！各自気を締めてかかるように。」
三人「「はい!!」」
３人が記念すべき最初に乗るモビルスーツは・・
【ＲＧＭ－７９Ｔ】ジム・トレーナー
地球連邦軍が開発した【ＲＧＭ－７９】ジムのバリエーションの１つで、訓練用に装備の出力を下げられていたり、教官用の複座があったりと、練習用のモビルスーツだ。
教官「お前達にはこのジム・トレーナーで訓練してもらう。教官として先輩のパイロットが一人ついてくれるから挨拶を済ませたら訓練に移れ。」
そうして訓練が始まった。
その日の夜・

ー自室ー

タークス「お前らどうだった？怖かったか？」

ルータ「正直に言おう、俺は怖かったぜ。あのでかいのを扱っていて何かあったらと怖い反面、逆に簡単に人を虐殺できる兵器を扱ってるという事に恐怖を感じた。」

ロゼ「自分もです。訓練と言ってますがあの機体で何人もの命を奪えるんですもんね。」

タークス「そうだな・俺も怖かったが、少し嬉しかった。」

タークス「念願のモビルスーツに乗れて、俺達の夢にまた1つ近づいたって感じだ。正直に言って嬉しいのほうが大きいのかもしれん。」

ルータ「タークス・・・そうだよな、俺達まだこんなところで止まってられないもんな。」

タークス「あぁ」

ロゼ「もっと・頑張らないと・ですね」

タークス「よしみんな！そうと決まれば寝るぞ！明日の訓練に備えて睡眠だ!!」

ロゼ「電気消しますね」

タークス「ありがとう」

こうして三人はモビルスーツの操縦を経験し、兵器の恐怖を感じた。しかし彼らのめげない心が三人の夢である「エースパイロット」に近づけた。

彼らはこの先、生きていける自信に満ちあふれていた。　タークスが一般人に強い印象を与えるのはまだ何年かあとの話・・・

UC．００８６　重力の底で・・・（３）

ＭＳ訓練が始まって２週間が経過しようとしていた日の朝のこと。
ウゥーーー!!ウゥーーー!!ウゥーーー!!
基地内にサイレンが響いた。
タークス「何事だ？警報がなるなんて」
ロゼ「わからないけど何かヤバい状況なのかもしれない。」
タークス「確かにそうだな、教官のもとへ行くか？」
ルータ「俺はそれが一番だと思うぜ。さぁ行くぞ！」
ロゼ「そうですね、急ぎましょう。」
ー基地本棟ー
タークス「教官、何があったんですか？」
教官「実は地球連邦軍反乱分子がこの基地に進軍しているようなんだ。」
ロゼ「え？」
教官「哨戒中の部隊が超遠距離に捉えた。しかもＭＳ１５機ぐらいのまあまあ大規模なんだ。」
タークス「我々はこのあと何をすれば？」
教官「お前たちはとりあえず待機命令を出そうかと考えている。まだお前たちは訓練兵だからな。実戦に出すわけにはいかんしな。」
ルータ「おいおい俺達を舐めないでほしいね教官殿よ。俺達三人は２週間もＭＳの訓練を行ってきたんだ！少しぐらい働けるぞ！」
タークス「そうです！我々も、我々自身の基地を、第二の家を守らせてください！」
教官「・・・・・・・・・・・・」
「いいんじゃないですか？教官殿」
教官「司令官！いいのですか？まだ三人は訓練兵ですよ、実力もそこまであるわけではないですし、今回は相手も数が多い。」
司令官「だったらなおさら一人でも多く兵がほしいな！それに私も訓練の様子を見ていたが、三人はかなり操縦技術もあるし上達も早い。それに防衛ぐらいなら出してもいいだろう。」

教官「わかりました。司令官がそこまで言うのであれば。聞いていたな三人とも。全員第三格納庫に急げ。あとはその場にいる第三小隊の隊長の指示に従え、いいな!!」
三人「「「ハイッ!!!!!!」」」
司令官「教官殿、君は戦車隊や航空隊の指揮に回ってもらえるかな？」
教官「わかりました。」
彼等は第三格納庫に向った。強い意志と奥に秘めた少しの恐怖を胸に持って・・・
ー第三格納庫ー
タークス「ここだ！第三格納庫だ。」
「お前らよく来たな！連絡はきている。そこの機体に乗れ」
タークス「わかりました！あなたが第三小隊隊長ですか？」
ジノン「そうだ！俺が第三小隊隊長のジノン・キャスタだ！」
タークス「わかりました。」
彼等は機体に乗った。彼らが乗った機体は「ジム・クゥエルカスタム」、
タークス「いよいよ実戦か、少し怖いな。」
ルータ「怖くねえやつの方が珍しいだろ。俺も教官の前であんなこと言ってたけど、いまめちゃくちゃ恐えもん。」
タークス「だよな」
ロゼ「準備完了。」
ジノン「よし！武装は全員そこのラックにかかっている武器を使え。誤射はすんなよ！」
タークス「了解！装備完了しました。」
ルータ「俺もできたぜ。」
ロゼ「同じく。」
ジノン「よし！では今回の戦術の説明を行う。現在敵軍は、基地西側の山岳部方面から進軍してきている。今の所補足しているのは直進してきている本隊だけだ。そこで我々は南西方面の本隊以外の存在を索敵しつつ裏取り予定だ。」

ジノン「そのため大人数では行けないため、お前たち三人と私の四人で向かう。第三小隊は正面の基地防衛につくから隊長がいなくても大丈夫だろう。」
タークス「わかりました。」
ルータ「了解よっと！」
ロゼ「了解」
ジノン「よし！第三小隊隊長ジノン出るぞ！」
タークス「タークス・ジガ、出る！」
ルータ「ルータ・スデラ、出撃するぜ！」
ロゼ「ロゼ・ズルーン、行きます。」
４人は作戦行動を開始した。南西方面に進軍し、索敵と敵の裏をつくために。

説明コーナー
・ジム・クゥエルカスタム
型式番号ＲＧＭ―７９ＱＣ
ジム・クゥエルの改修機、ジム・クゥエルはもともとティターンズが最初期に量産したモビルスーツで、宇宙やスペースコロニー内用に設計されて作られていたが地球上での活動用に改修をした機体。通常のジム・クゥエルでも地上で活動はできるが、運動性がどうしても低下してしまう。そのため運動性を上げるために改修した機体。
機体性能に関しては防塵防砂加工やショックアブソーバの強化、各部排熱機構の強化などが行われており、地上での活躍がしやすくなっている。
武装
・頭部６０ｍｍバルカン砲
連邦軍機体のほぼ基本装備。
・ビームサーベル

上記に同じく
・ジム・ライフル
ジム・カスタムが使っていたものと同型
・ストライカーシールド改
ジム・ストライカーのシールドを改修したもの。防御力が強化され、ビームコーティングが塗られている。
内部に武器のマガジンを装備。
・腕部2連装グレネードランチャー
基本的にZガンダムのような物
・ヒートナイフ
腰に装備されている格闘武器。リーチは短いが使い勝手がよく、投げたり切ったりと。

小隊
この基地には第一小隊から第四小隊まで存在していて、第一から第三までが通常任務。第四小隊が哨戒もおこなう小隊。
各小隊部隊長一人と他四名計五名で構成される。
基本的にモビルスーツは変わらないことが多いが、第四小隊だけは索敵強化型が配備されている。

UC．００８６　重力の底で…（４）

タークス達３人と第三小隊隊長のジノンは南西方面に向けて進行していた。

現時刻は朝の０４０２　季節は秋から冬への変わり目。

機体の足音と反応の無いレーダー、まだ少しくらい周囲と緊張で会話のない４人のせいなのか、全員が全員変な恐怖を感じていた。

ジノン「お前らどうした？やっぱり怖いのか？」

ジノンは緊張をほぐそうとするのとこの空気をなんとかしたかったのか煽るかのように言ってきた。

ルータ「隊長こそビビってんじゃないすか？」

ルータは煽りを受けて言い返すが、明らかにいつもと違う。やはり緊張と恐怖を感じていた。

ジノン「俺は大丈夫だ。怖いときは怖いというからな。どっかの強がりと違ってな」

ジノンも言い返す。

タークス「ふふっ」

ルータ「おまっ！タークス！笑ってんじゃねえよ！俺は強がってねぇ！」

ジノン「誰もお前とは言ってないぞ」

少しだけ皆の中に余裕ができた。

隊長とは仲間の心の状況を把握して管理するのも仕事だ。いや、義務だ。

ジノン「よし！そろそろ一度止まって広域レーダーを起動させて周囲の警戒をしよう。」

そう言うと全員が一斉に止まって周囲を見渡している。

ジノン「３番機！お前の背中に簡易レーダーポットを搭載してある。それをここに設置してくれ」

３番機の装備には全部隊レーダーポットを装備できるようにジョイントがある。ロゼが乗っている三番機にももちろんあり、今回は

レーダーポットを装備している。
ロゼ「設置完了しました。問題ありません」
ジノン「よし！全機火器の安全装置をいつでも外せるようにしておけ。いつ戦闘になるかわからん！警戒を怠るなよ！」
３人「「「はい！」」」
全機が戦闘準備を済ませていく。各部の負荷の状況と損傷状況、システムを的確に素早くチェックしていく。
ジノン「ではこれから北西方面に向けて進行する。敵部隊の早期発見と後ろからの奇襲を兼ねている。的に察知されないように慎重に行動せよ。発砲は緊急事態以外許可あるまで禁じる」
ジノンはタークスたちに注意喚起と作戦を伝えた。タークス達三人がその指示を確認すると全機がジノンの後ろに近づいて行動準備を整えた。
ジノン「よし！行くぞ！」
全機がジノンの後ろをついて歩いていく。
三人「「「…」」」
全員が静まり返っている。ジノンがたまに指示を出すときに軽く返事をするぐらいでほとんど喋らない。
それもそのはず、これから戦闘になるぞとジノンに言われたようなものだ。これから死ぬかもしれない時に緊張しないほうがおかしい。
私語がないのはいい事かもしれないが、左右の確認をしたりしあったりしないのだ。つまりチームワークがないと言うべきか。
ジノン「全機止まれ！そのまましゃがめ！」

前方に敵部隊を補足した。その為一度止まり、裏とりができるように待機する作戦だ。
ジノン「よし！全機！裏とりして攻めるぞ！」
タークス「いよいよか、気を引き締めねえとな」
ルータ「あぁ、やってやる」
ロゼ「援護します」
三人も気を引き締めて構える。

ジノン「全機！行くぞぉぉ!!!」
３人「「「おおおお！」」」

戦闘が始まった。

重力の中の嵐

タークス達3人と第三小隊隊長のジノンは南西方面に進軍後、西方面から進軍中の敵本隊と思われる部隊を補足。敵本隊後方から奇襲をかける。

指令部

オペレーター「南西方面から敵本隊に奇襲をかける予定の部隊から入電」

司令官「読み上げろ」

オペレーター「敵本隊の裏取りに成功、奇襲します」

司令官「よし！了解した。防衛の第一小隊・第二小隊、航空機と戦車部隊に通達せよ、これより防衛部隊は射撃攻撃しつつ正面から敵部隊を攻撃。奇襲部隊と挟撃せよ。」

オペレーター「全部隊に通達します。これより防衛部隊は射撃攻撃しつつ正面から敵部隊を攻撃。奇襲部隊と挟撃せよ。」

第一小隊隊長カイン・デルカ「了解しました。」

第二小隊隊長アラン・バスカ「了解!!」

防衛小隊の指揮官は基本的に司令部の司令官だが、現場指示は基本的に第一小隊隊長が行う。二番目が第二小隊隊長だ。

そして第一小隊隊長カイン・デルカが声をかける

カイン「全機現在の指示に従って行動する！現場では基本的に私の指示に従うように！勝手な行動はなるべくするなよ！」

カインは隊長として最低限のことを言った。なるべくするなよと言ったのは、カインでも何が起こるかなんてわからないからだ。未来予知ができたらとっくにジャブローあたりにいるだろう。

戦闘機パイロット「敵本隊を確認。戦闘機部隊が先行して先制攻撃を撃ちます。」

カイン「了解した。先行攻撃終了し次第挟撃する。聞いていたな？ジノン」

ジノン「わかっている」

戦闘機が敵本隊を確認したあと先制攻撃に移る。絨毯爆撃とミサイル攻撃だ。どちらもモビルスーツに特効があるというわけではないが効かないわけではない。
戦闘機部隊が攻撃に移る。
ミサイル着弾の轟音が響き、爆撃による爆発の煙が発生する。
戦闘機パイロット「敵部隊に命中。依然として敵ＭＳは健在。敵ＭＳはザクタイプ１０機程度。それと鹵獲されたと思われるジムタイプの機体１０から１５。タンク系が５機程度。戦車が多数だ。別動隊は今の所確認ならず。以上状況報告を終わる。これより戦闘機部隊は北方面を旋回して偵察しつつ基地へ帰還する。」
長々と戦闘機パイロットが報告し、モビルスーツ部隊が動き出す。
第一小隊と第二小隊、居残りの第三小隊をメインとして、サポートに戦車部隊だ。
カイン「随分多いな、よくそんな戦力用意できたものだ。」
アラン「ホントだよ。全くまだ少し眠いってのに。絶対許さん」
カイン「眠いからって死ぬなよ？死んだら元も子もないからな」
アラン「わかってるわ！」

小隊長は部下を連れて進行する。敵の攻撃に当たらないように斜めに歩きながら進行する。
ダダダダダッ
敵も少しずつ基地方面に進みつつ射撃攻撃をしてくる。　ＭＳ部隊はシールドで防御しながらライフルで攻撃していく。
戦車部隊はＭＳの後ろに隠れながら砲撃で援護する。
一方その頃奇襲部隊は……

ジノン「よし！３人とも準備はいいな。行くぞ！」
４機が敵部隊を後ろから攻撃していく。
ダダダダダダダダダダ
ジムライフルを敵に当てていく。３人とも訓練を思い出しつつ慎

重に処理していく。
敵のＭＳはバックパックや関節部をやられて、爆発により転倒したり姿勢を維持できなくなった機体もいる。
ジノン「よし！全機散開しつつ周辺の岩陰に隠れろ！隙を見つけたら攻撃していけ！」
タークス「はぁ　はぁ　はぁ」
ルータ「ふぅ　少し落ち着いたか？」
ロゼ「そうですね。一段落ですかね。それにしてもやはり実戦は緊張します。」
タークス「そりゃあそうだろ。」
３人は初めての実戦で緊張していた為息切れしたり、少し疲れている。
ジノンは慣れているのかピンピンしている。
ダダダダダッ
敵もマシンガンで攻撃してくる。
ロゼ「私がハンドグレネードを使います。隙を作るので射撃攻撃をお願いします。」
タークス「わかった。カウント！　スリーツーワン！」
ロゼ「ＧＯ！」
ルータ「ＧＯＯＯＯＯＯＯＯ!!!!!!!!」
ロゼの投げたハンドグレネードが敵の機体の近くで爆発し、敵の機体の攻撃が止まる。そこをタークスとルータはすかさずライフルを叩き込む。
ズダダダダ
奇襲部隊の方を見ていた敵をすべて殲滅。防衛部隊と戦闘している敵は基地の方へ進んでいるため攻撃するには移動しなければならない。
ジノン「あいつら……エースになるな……」
ジノンは三人の動きを見ていてそう思った。ジノンはエースとは仲間と協力して強い敵を討ち取る凄腕パイロットのことを指していると思っていた。

ジノン「司令部こちら第三小隊隊長ジノン・キャスタ。応答願います。」
オペレーター「こちら司令部です。そちらの状況の報告をお願いします。」
ジノン「報告します。奇襲部隊は奇襲に成功。後方部隊を殲滅、現在武器の確認を終了しました。」
オペレーター「了解しました。周辺の偵察を行った後に防衛部隊と戦っている敵本隊に攻撃を仕掛けてください。」
ジノン「了解しました。　聞いていたな？周辺の偵察を開始しろ！」
３人「「了解」」
３人とも偵察を始めた。
防衛部隊はその頃……